
神様は僕らに微笑んだ

悲喜 小守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様は僕らに微笑んだ

【Nコード】

N1137H

【作者名】

悲喜 小守

【あらすじ】

「金曜日の午後4時04分、ある言葉を言うと星神様が現れて悩み事を解決してくれる」と言う噂が粉江蒼の学年で流れた。ある日、蒼の友人、棗志良が星神様のおまじないを行なった日から次々と蒼の周りで不思議なできごとが起こり出した

第1話：星神様（前書き）

ホラーではないかも知れませんが一応ホラーにさせていただきます。

第1話：星神様

「いっつも難しい本ばかり。それでアンタ、楽しい？」

ニツコリと、隼はやぶさ恵美は笑った。

俺はコイツがどうも苦手だ。

皮肉ばかり言ってくる。

そして隼に睨みを返してやった。

すると隼はクスクスと笑って言った。

「そんなんで医者になれないよ」

「うるさいな、隼に関係無いだろ」

「あるよ」

相変わらずの笑みで隼はそう言った。

「だって、私がアンタのいる病院に行くかもしれないじゃない」

「安心しろ、お前のいない所に行くから」

そう言って俺は再び本を読んだ。

「ねえ、何でアンタは医者になりたいの？」

ガタンツと立ち上がった。

そのまま俺は隼の言葉を無視して教室を出た。

何で医者になりたいかだって？

そんなの、決まってるじゃないか。

「ねえ、星神様って知ってる？」

暫く廊下を歩いていると、そんな声が聞こえた

「（星神様？）」

「知ってる知ってる。アレでしょ？ってあれ…？なんだっけ…」

「悩み事を聞いてくれて、しかも助言してくれるんだって！」

ありふれた噂話だと、思った。

そう言えば、最近その星神様の話で少なくともこの学年は持ちきりだ。

しかし、その後の噂をしていた奴らの話では、まだ試した者はいないと言っ。

この時は、まだ。俺には関係のない話だと、この噂は俺の記憶の隅に追いやられた。

第2話：粉江 蒼

「棗くん」

私は入学当初からこのクラスで孤立している棗志良なつめしらくんらに声をかけた。

この人は中学の頃から一緒に、医学好きの兄、蒼そうの友人だった。話した事はあまりないけど。

「棗くんって蒼の友達じゃない？大変でしょ。あの意地っ張り」

「別に…」

「…」

棗くんとはいつも話が続かない。

話を直ぐ終わらせようとするからだ。

「えっと…あつ！そうそう、星神様って知ってる？」

最近この学年はその話題で持ちきりだ。
なのでその話を話題に持ちあげた。

「名前だけは」

「へえ〜。棗くんも知ってたんだ…！」

あのね、その話なんだけど、

金曜日の午後4時04分に”アルテス・タストナ・アトロポス”って言うつと星神様が現れて、悩み事に助言してくれるんだって！

「凄いよね」

「女子ってそう言うの好きだよな」

「棗くんはそれつきり喋らなくなった。」

「これが、そもそもの始まりだったんだと、私は後、知る事になる。」

「蒼、またそんな本読んでるのか。」

「医学書を読んでいると、志良がそう声をかけて来た。」

「まだ医者になんてなろうと思ってるのか？
何でお前はそんなに医者になりたいんだ」

「パターンと本を閉じる。」

「そして志良に目を向ける。」

「そして笑いながら俺は言った」

「さっきも隼に言われたよ。」

「あっそ。で？何でそんなに医者になりたいんだ？」

「志良は再び尋ねた。」

「…俺は…俺は自己満足で医者になるんだ…」

俺はそう答えた。

「自己満足？」

「そ、親に認めてもらう為にな」

「蒼の親は十分 蒼を認めているだろ？」

「表向きはな…」

笑って見せると、それから、志良は尋ねてくる事は無かった。

気まずい雰囲気の中、

俺の部屋の扉が勢いよく開いた。

第3話：棗 志良

「棗くんだー！！」

「粉江こなえ／胡亜こあ……」

「えっ？何、何で私が入った途端二人共青褪めるの？」

「それはお前が苦手だからだ」

「ヒドッ！ま、いいや」

胡亜は切り替えが早い。のでとても扱い易かったりする。

「なんの話してたの？」

「別にお前に関係無いだろ」

「気になるじゃん」

「とりあえず出てけ。ってそう言や志良。時間平気か？」

「ん？ああ、そろそろ帰らないと」

「そか。じゃあまた明日な」

「おっ」

そう言って志良は部屋を出た。

「お見送りくらいすればいいのに。」

「そんなんするの女子だけだろ」

「…そうかなあ…?」

「そうだよ。」

「で、なんか用か?」

「えっ? ああ、そうそう、棗くんの事なんだけども。」

「志良?」

「うん、この間さ、”僕には家族がないんだよ”とかいきなりブル入っちゃうから、ビックリして。」

「蒼 何か知ってるのかなあって思って。」

「ああ、アイツ子供の頃親亡くしてるんだよ。」

「特に預かってくれる親戚もいなくて、施設に預けられてそこでまた拾われた? んだって。」

「…」

「なんだよ。 黙るなよ」

「いやさ、なんか難しいな〜って。」

「そりゃあな。 お前の空っぽの脳みそでは理解できないだろうよ」

「何おう?!」

そしてケンカが始まった。それから五分くらいして、母さんが帰って来て、俺ばかり怒られた。

何でだチクシヨウ…

第4話：星神様・2

蒼と一時間ほど話してから、蒼の家を出た。そしていつものように買物をして家に帰る。

今、僕の家には誰もいない。

父さんも母さんも帰ってこない。

きつと、捨てられたんだと思う。

蒼や蒼の妹を見ていたら、妹の方にある日つい”僕には家族がいな
い”何て口にしてしまった。

まあ、あの妹の事だ、もう忘れてるだろう。バカだから。

家に帰ってコンビニの袋をテーブルに投げるように置き、ソファに
寝転がった。

今の時間は4時丁度。

「そう言えば、4時04分が星神様だっけか。」

天井を見上げながらそう言う。

昼、学校で蒼の妹が言っていたことを思い出したのだ。

どうせ迷信だろう。

そう思った。

けど、何となく好奇心が湧き上がり、やってみようと思った。

まじないの言葉をぼそりと唱えた

「アルテス・タストナ・アトロポス」

カチッ

時計が小さな音を立てた時だった。

目の前が急に歪んで、思わず目を閉じる。
再び目を開けると、そこは

「う、宇宙…?」

『そつだよぉ〜』

笑い声まじりのふざけた声が、背後から聞こえた

『正確にはイリュージョン…幻影だけどねえ〜』

クスクスと笑い声が響く。

僕はその声の正体を睨みつけた。

「誰だ、お前…?」

『それは私のセリフだよぉ。』

勝手に私を呼び起こしてくれちゃってさあ…

本当、迷惑してるんだよねえ〜』

尚も笑い続ける奴に僕はもう一度言った。

「だから、お前は一体何者なんだ?!」

『知らないのに名を聞く時は、自分から』がそっちのルールでしょ?」

「だったらちゃんと自分から答えてよお」

「…僕は、棗 志良だ」

『へえ〜シラクん。』

「そっちの食べ物のタラとかシラスみたいだねえ〜」

「こいつの喋り方は、何だか腹立たしい。」

「答えたんだからお前も答える!お前は何なんだ?!」

苛立った口調でそう言った。

『私?私はねえ…アステル・テオス。』

「そうだねえ…そっちの言葉では星神って言うかなあ…」

「星、神…?」

「コイツが本当に星神なら、あの噂は本当だって言う事が…?」

『私をわざわざ起したって事はあ…』

「悩みを削除して欲しいんでしょうお?」

「クスクス クスクス辺りに笑い声が響いていて、とても居心地が悪い。」

普段出す事の無いような、雄叫びのような声を上げて。

『フフフツ…フフフフ…アハハハハハ…!!』

ザマア見るオオオ!!

これが、私を呼び起した罪だよおおお!!…!!』

最後の星神の笑い声が頭から離れない

そして、僕の意識は途絶えた。

第5話：死（前書き）

最後の方、残酷な描写（？）があります。
ご注意ください。

第5話：死

一週間後

「粉江。またそんな難しい本…？
アンタって本当、つまらないねえ」

また隼がその声をかけて来た。

「うるさいな。別にいいだろ」

「ま、そうだけど」

今日はしつこくないな…
少しそう思った。

「あ、そうだ。お前、志良のこと何か知らないか？
隼、志良の従兄弟だろ」

「しらなあい。何で？」

「いや、最近学校に来てないし、連絡もつかなくて。」

「だったらシラの家に行けばいいじゃん？」

「そうだけど…」

「ま、どうでもいいけどあゝ」

隼がそう言った直後、チャイムが鳴り、隼は自分の席に戻って行った。

放課後

やっぱり志良の様子が気になったので、俺は志良の住むアパートに向った。

ピンポン

インターフォンが志良の住む部屋に鳴り響く。

誰もでない。

ドアノブに手をかけ、回してみるとガチャリと扉が開いた。

「物騒だな。鍵も閉めないなんて」

そう言いながら、中に志良がいるかもしれないと思って、入って見た。

志良の部屋を覗いてみると、そこには毛布に包まっている”何か”がいた。

「…志良か…？」

声をかけてみると、その”何か”はビクリと一度体を震わせ、顔を上げた。

「やっぱり志良か…」

そう言っつて志良の元へ歩を進める。

「どうしたんだよ、そんな隅っこで毛布なんか包まって。暑くないのか？」

その言葉に志良は答える事はない。
随分近付いた所でやっと気付く。

志良はこぎしみに震えていた。

「おいおい、何そんな震えてんだよ」

パンツ

肩に手を置いた所だった

思いきり肩に置かれていた手を叩かれた。

「っ！！わ、わるい…」

そう言っつて再び毛布に包まり、ブルブルと震え出す志良。

「お、おい…一体どうしたんだよ、そんな震えて…」

「おまじない…」

ボソリとした声でよく聞こえない。

「え？」

「星神…様の、おま、じない…」

「…？ああ！アレか。それがどうした？」

「一週間前、やったんだ…」

「は？お前そんなのやる程の悩み持ってたの？」

「ち、がう…どうせ暇だから、ってやったんだ。

そした、ら…」

「そしたら…？」

「…っ！…あのまじないは本物だ！

絶対やつちやいけない、アイツは、星神は…！！」

「お、おい！分かったから、少し落ちつけ！

それで、やってどうなったんだ…？」

「っ…」

聞くと志良は頭を抱えた。

「わからない…わからないんだ…

目が醒めたら何も分からなくなった…

暫くソファに座っていたら、少しずつ思い出したんだ…

自分でも気付かないほどのちっぽけな悩みも抉り出されて、
全ての悩みが削除された…

最後に聞こえたのは、アイツの、星神の嗤い声だった…」

「その悩みって、なんだよ」

「わからない、わからないんだよ…」

全て削除するって言われた。

きつと何も無いんだ…

なあ、何で僕は今、このアパートにいるんだ…？

僕の親はどこにいる…？

僕には家族がいたのか…？お前達みたいな、家族が…

そもそも、僕はもともとこの世界にいたのか?!」

「いたに決まってるだろ?!何言ってるんだよ!!」

お前の親が何処にいるかなんて、お前が親のケータイにかければ済む話じゃないか!」

「わからないんだ、わからない。

何も分からない…

僕は誰だ…？お前は…おまえは、誰だ…？」

「何言ってるんだ!俺はお前のダチだろ?!」

テレビでも見て落ちつけよ!」

そう言ってるリモコンを使ってテレビをつけた。

そこには…

《今日未明、変死体が静岡県のあるホテルにて発見されました。

その変死体の人物は未だどなたのものか分かっておらず…

！！今、このニュースの新しい情報が入って来ました！
どうやらどなたの遺体かわかった模様です。

画像が今出ます。》

ニュースキャスターがそう言った後、パツと画面が切り替わり、二人分の画像が映し出された。

《亡くなったのは東京都在住の43・45歳のご夫妻、
棗 沙和さんと棗 青次さんです。

繰り返します。亡くなったのは 》

名前の部分と画像が頭から離れない。
何で、何で…

「何で、志良のお袋と親父が…？」

「星神だ…」

星神だ…」

テレビ画面を見つめながら頭を抱えそう繰り返す志良。

「落ちつけよ！そんなワケ…そんなワケないだろ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1137h/>

神様は僕らに微笑んだ

2011年1月23日02時51分発行